

第71図 D区 北壁断面図(畦畔部)

B) 遺構各説(図版61)

D区において、遺構は、黄灰褐色土直上において検出されるが、検出遺構の主なものは、犂溝・土壇・井戸の類である。但し、弥生時代・古墳時代・古代の遺構は検出されず、ここで報告しうる遺構は、すべて中・近世以降のものである。遺構面直上からは、図版85-8・9のような黑色土器や陶器片が出土している。

<中・近世>

a) 犂溝

4000-OZ (図版49・50上)

D区全般にわたって、図版49・50上に示したような、犂溝が検出されている。各々は、幅15cm前後、深さ4～5cmを測るが、全体で、約30條近くの犂溝が、平行するかたちで検出されている。小溝内からは、僅かに、瓦器と陶磁器の小片が出土している。但し、下層の灰褐色砂礫層内からも近世陶磁器片が出土しているので、この犂溝の年代は、近世以後に位置づけるべきである。また、第71図に示した、灰褐色砂礫層下の高まりについては、それを畦畔であると判断しているが、遺物の共伴はなく、ここでは近世以前の畦畔というにとどめておく。なお、軸性は、いずれも、周辺の条甲の軸と一致している。

b) 土壇

4001-OO (図版50下)

D区においては、センターポイントNo.109+10m付近の北端部で、土壇4001-OOが1基のみ検出されている。直径約80cm、深さ12cm前後を測る、ほぼ円形のプランをもつ底部フラットの土壇であるが、遺物は出土していない。土壇の性格は明確ではないが、次の

べる井戸との関連で、たとえば、給水用の桶置場など、一体的にその機能を想定する方が、より実態に即していると考えている。時代は、近世に属する。

c) 井戸

4002-OW (図版50下)

今のべた土壌4001-00のすぐ南に隣接して検出されるのが、井戸4002-OWである。直径190cm、深さ約120cm以上を測る。井戸内部からは、瓦器と陶磁器の破片が検出されており、主として、近世に機能した井戸であると考えている。

以上が、D区において検出された遺構・遺物の説明である。

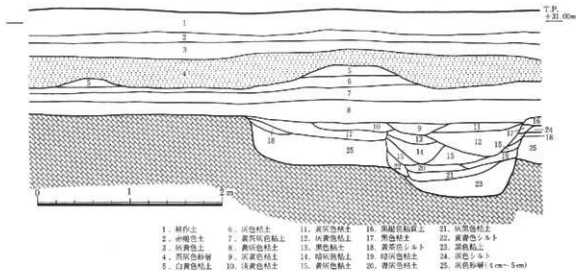
V. E地区の調査

7) E区の遺構と遺物

E区は、D区の東接区にあたり、図版6上に示したような台形状の範囲をさしている。

A) 層序 (第69図)

E区の層序については、第69図の下段に示したとおりであるが、若干の盛土の下に、耕



第72図 E区 南壁断面図 (駐畔部)

作土、赤褐色土、灰黄褐色土があり、その下に約30cmを測る灰褐色砂礫層があって、更にその下に黄灰色土、灰色土が横たわる層序になっている。灰褐色砂礫層より上層の包含層内からは、第74図の3・4に示したような弥生時代の壺形土器や壘形土器も出土しているが、その下の灰褐色砂礫層自体が、図版87-2・6～10、図版88-1～8に掲げたような弥生時代の壺形土器、高坏形土器などに加え、古墳時代の土師器小型丸底壺、須恵器坏身・中世陶器・近世陶磁器片なども伴っている（第74図-9参照）ので、層位的には、この層位に対しては、近世以降の年代を与えざるを得ない。図版87-3に掲げた陶磁器片が、赤褐色土層内からの出土であることも、この点をほぼ裏づける資料となっている。

遺構は、灰黄褐色土層上面で一面と、灰褐色砂礫層下で一面と、さらにその約30cm下の黄色土層直上で一面と、合計三面検出されるが、その主な検出遺構は、下記のとおりである。

B) 遺構各説（図版61）

<古墳時代および中・近世>

E区で検出される遺構は、一部、古墳時代の河川を伴うものの、主として、中・近世に属する遺構が中心であり、犁溝・畦畔などが、それに該当する。

a) 犁溝および畦畔

5000-OZ（図版51上）

犁溝5000-OZは、図版51上に示した、灰黄褐色土層上面で検出される小溝群である。個々の溝は、幅15cm前後、深さ4～5cmを測るが、丁度、D区でのべた4000-OZと同様に、軸を同じくして南北に伸びている。犁溝内からは、若干の陶磁器片が検出されているにすぎない。E区の第1遺構面である。

5001-OZ（第72図・図版51下・図版52上）

畦畔5001-OZは、近世遺物を伴う灰褐色砂礫層下で検出される畦畔の遺構である。南端部では、灰褐色砂礫層相当層が茶灰色砂層になっているが、第72図をみると明らかなように、この砂層直下において、第2遺構面ともいべき畦畔断面が検出される。その全体的様相は、図版6上・51下・52上などに示したとおりであるが、綺麗な長方形の小区画を呈している。時期的には、直上の砂礫層が近世遺物を伴っていること、加えて後述の下

方の遺構面直上から弥生・古墳時代の遺物のほかに瓦器坑などの中世遺物が検出されていることなどから、この畦畔は中・近世に属する遺構であると判断している。

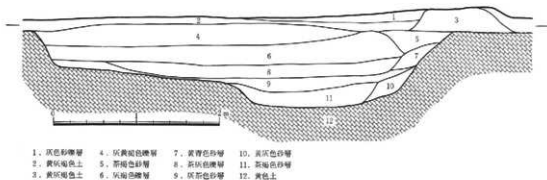
b) 自然河川

5002-OR (第69・73図、図版52下)

E区第3遺構面は、畦畔5001-OZより、約30m程下方の、黄色土層直上において検出される。黄色土層直上からの出土遺物は、第74図の5～8に示したとおりであるが、弥生時代の壺形土器、甕形土器、高坏形土器などに加え、瓦器坑なども出土している。この点を補足するのが、図版87-11～19・図版88-10～15までの遺物であるが、図版87-11～16は弥生の壺形土器、甕形土器、高坏形土器であり、17～19は須恵器甕の破片、図版88-10～15は瓦器の小片である。一方、石器も数点出土しているが、第65図の2に掲げた尖頭器（図版104-13）などが、それである。

自然河川5002-ORは、この黄色土層上面において検出されるのであるが、その断面図は第69図の下段や第73図に示したとおりである。河川幅は約10m前後、深さは約1.5m前後を測るが、河川内には、比較的、粒子の細かい砂層堆積と礫層堆積とが、交互に観察される（図版52下）。出土遺物は僅少であるが、弥生土器片と須恵器片のみを出土しており（図版86-10参照）、中・近世の遺物は出土していない。遺構の様相・遺物の内容の比較検討から、恐らくは、C区南端区で検出された自然河川3001-ORと、同一流路であるものと考えている。

なお、第3遺構面について言えば、E区の南端部で、第72図に示したような、落ち込み状の断面を観察することができたが、その性格・時期等については、遺物の出土をみながっ



第73図 E区 南北セクション (5002-OR)

たため、明らかにしえなかった。

以上が、E区における遺構と遺物の説明である。

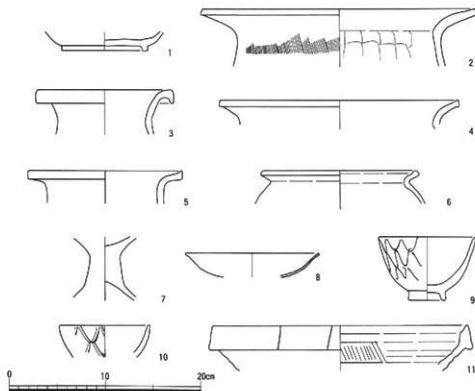
VI. F地区の調査

8) F区の遺構と遺物

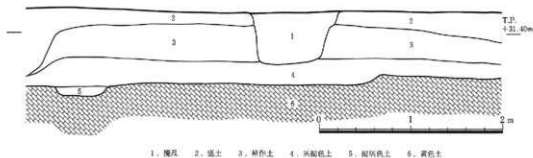
F区は、E区の東側に位置しているが、既存の駐車場の関係で、調査区をF-1区・F-2区に分割して、調査を実施した(図版6上)。

A) 層序(第75図・図版53上)

F区の層序については、第75図に、F-2区の北壁断面図を掲げているが、耕作土、灰褐色土、黄色土という順序で、土層の堆積を観察することができる(図版53上参照)。但し、黄色を呈する遺構面に到達するまで、遺物はほとんど検出されなかった。



第74図 D・E・F区 包含層・遺構面直上出土土器



第75図 F区 北壁断面図

B) 遺構各説 (図版61)

<古墳時代および中・近世>

a) 土壌

F区での検出遺構について言えば、殊に、F-1区は、既往の建物の建設および撤去に伴って、かなりの擾乱が生じており、明確な遺構は検出されなかった。他方、F-2区は、F-1区に比べると遺存の状態はよかったものの、遺構はほとんど存在せず、第75図の北壁断面図に示したように、黄色土層直上において、小さな土塊状の落ちこみを検出したのみである。但し、土壌内からの遺物は出土していないので、時期は不明である。

b) 自然河川

6003-OR (図版53下)

F-1・F-2区のそれぞれの黄色土直上からは、第74図の10に掲げた陶磁器片 (図版88-17) や11に掲げた摺り鉢片 (図版88-16) などが出土しているが、この黄色土層上面において、自然河川6003-ORの右岸肩が検出されている。河川内からの遺物は、調査区の狭小性もあって、殆んど検出されていない。C区・E区で検出された3001-OR・5002-ORなどとつながっていく公算は大きい。

F区の調査成果は、以上のべたとおりであるが、E・F区の遺構平面図全体については、付図の第3図を参照されたい。

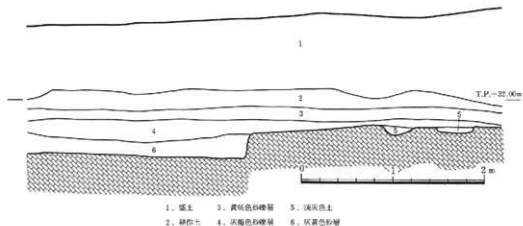
Ⅶ. G区の調査

9) G区の遺構と遺物

今までのべてきた全ての調査区は、水間街道の西側に位置していたが、G区は、水間街道の東側の、水間街道と鉄道とがもっとも近接するあたりに設定された調査区である（図版6下）。

A) 層序（第76図）

G区における層序は、第76図に示したとおりであるが、耕作土の下において、黄灰色砂礫層や灰褐色砂礫層、そして灰黄色砂層の堆積が認められ、これら礫層・砂層の下において、黄褐色土層が検出される。但し、これら砂礫層内からは、遺物は出土していない。



第76図 G区 北壁断面図

B) 遺構各説（図版62）

<中・近世>

G区で検出された遺構は、溝とピットである。

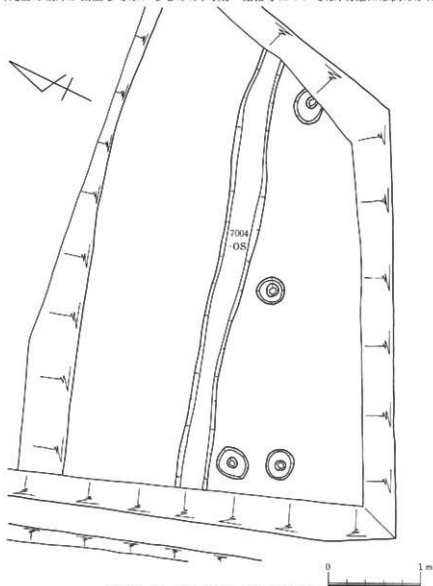
a) 溝状遺構

7004-OS（第77図・図版54）

G区においては、第77図に示したような、東西に走る溝状遺構が、一条検出されている。幅26～40cm前後、深さ10cmを測り、他の中世遺構と同じく、淡灰色土がはいっている。溝内からは、瓦器の小片が出土している。

b) ビット (第77図・図版54)

今のべた溝状遺構7004-OSにはほぼ平行もしくは直交して、ビットが、合計4ヶ所において検出されている。直径約30cm前後をはかり、深さ20cm前後の残存状況を示している。特に、平行する3個のビットは、同一ライン上において、ほぼ等間隔に並んでおり、さらに周辺部へビットが規則的に伸びていき、建物跡を構成する可能性を有している。ビット内から、瓦器の破片が出上してはいるものの、時期・性格等については、明確には決めがたい。



第77図 G区 溝 (7004-OS) 遺構平面図

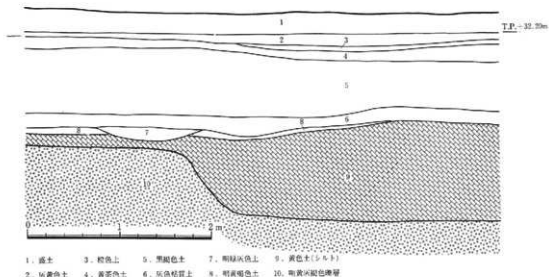
Ⅷ. H地区の調査

10) H区の遺構と遺物

H区は、石才南遺跡の調査区の中では、最も東端の部分に位置しており、水間街道現道に、直接面する調査区であり、隣は清見遺跡の調査区と界を接している（図版6下）。

A) 層序（第78図・図版55下）

H区の層序は、第78図に示したとおりであるが、第1層から第5層までは、現代にかかわる層位（図版88-9の陶磁器片は、攪乱内からの出土である）であり、田状を保っているのは、第6層の灰色粘質土層より、下方の部分のみである。すなわち、灰色粘土の下に明黄褐色土層があり、さらにその下方に黄色のシルト層があり、その下に、段丘礫層と思われるが、厚い明黄灰褐色の礫層が横たわるという層序である。



第78図 H区 東壁断面図

B) 遺構各説（図版62）

<中・近世>

H区において、遺構が確認されるのは、第78図が示しているように、明黄褐色土直上においてである。断面にひっかかっているのは、土塊状遺構の端部であると思われるが、この面で検出される主たる遺構は、犁溝である。

犁溝

8005-OZ (図版55上)

図版55上に示したように、遺構面直上において、約10条ほどの犁溝が検出されている。幅10～15cm、深さ4～5cmを測るが、図版88-18に掲げたような陶磁器片が、小溝内から出土している。近世の犁溝であると判断される。

以上が、H区の遺構と遺物の説明である。なお、G・H区の遺構平面図全体については、付図の第4図を参照されたい。

第4章 まとめ

さて、以上のべたところが、昭和61年度・62年度の2ヶ年にわたって調査した、その成果の報告である。本章では、その全体像をまとめると同時に、その成果を整理し、加えて今後追究すべき、幾つかの問題点について、述べておきたいと思う。

<縄文時代>

石才南遺跡自体が、近木川右岸の段丘上に立地していることは、先にもふれたとおりであるが、この地に、人々の生活痕跡を見出すことができるようになるのは、縄文時代後期以後のことである。明確な縄文時代の遺構や縄文土器そのものの検出はなされなかったものの、A-1区やA-3区の遺構面直上から出土した縄文石鏃や、B区の中の溝状遺構2000-OSから出土した石刀、あるいは、C区の中の溝状遺構2001-OS内から出土した石匙などの存在が、そのことを裏づけている。これらの遺物は、後代の混入品とは言え、当該区もしくは上流の近接区において、縄文時代の生活空間が存在したことを示唆する間接資料として、重要である。

<弥生時代>

続く弥生時代になると、特に調査区西半部のA-1区からA-3区までの範囲は、弥生時代の「集落の中心」という観を呈するようになる。殊に、弥生時代中期中葉～後半（畿内第Ⅲ～Ⅳ様式）にかけての遺構・遺物が、密度高く、大量に検出されることになった。居住空間としての竪穴住居址は、合計6棟検出されているが、そのうちの3棟は、直径8

m前後を測る円形のプランをもつ竪穴住居址(260-OD・410-OD・456-OD)であり、他の3棟は、一片3.0~3.8m前後を測る隅丸方形のプランを有する竪穴住居址(1-OD・2-OD・401-OD)である。床面直上からの出土遺物や、他の遺構との切り合い関係から判断できるこれら竪穴住居の時代性は、おおむね260-OD(Ⅱ~Ⅲ様式)・456-OD(Ⅲ様式)・410-OD(Ⅲ~Ⅳ様式)・401-OD(Ⅲ~Ⅳ様式)・1-OD(V様式以前)・2-OD(V様式以後)の順序で考えているが、これらの変遷の中で、特に、456-ODと401-ODとを端的な例として比較する時、単に円形・隅丸方形というプランの相違以外に、弥生時代中期後半に至って、規模の極端な縮小化の傾向(直径8m、あるいはそれを拡張する傾向から、一辺3.6m前後の小型のものへと縮小する傾向)を認めることができる。しかも、後者の隅丸方形の竪穴住居址401-ODの場合、その廃絶の仕方の中に、一種の異常性もしくは突発性をよみとることができ(これは焼失家屋であり、床面直上からは、炭化物・焼土・灰にまじって、大量の壺形土器・甕形土器・高坏形土器・石庖丁・叩石・凹石などの他に、石製武器である石鏃・石槍などが、放置され、散乱したままの状態で見出された)、今後、周辺遺跡との関連などを考慮にいれながら、代表的な軍事的集落の一としての歴史的位置づけをはかっていくことが必要となる。

その他、これら竪穴住居址の周辺で、A-1区・A-2区・A-3区・B区の4区を合わせて、約120基前後の土壌墓群が見出されているが、その殆んどは、楕円もしくは隅丸長方形のプランをもつ土壌墓群および土器陪葬である。土壌墓群の中には、土器・石器などの遺物を共伴する土壌とそうでない土壌との二種が存在するが、但し、前者の場合でも、出土の仕方から判断して、果たして副葬もしくは供献といった、明確な規定づけが可能かという点、必ずしもそうであるとは言いがたい。すなわち、A-1区の10-00・12-00、A-2区の54-00・405-00、A-3区の466-00・531-00、B区の762-00・763-00などのような土器小片の出土の場合には、これは、単に埋葬時に、偶々、その埋土の中に、土器片が混在していて、それが墓墳の中に投入された結果であると考えた方がよいであろう。他方、A-1区の268-00・281-00、A-3区の787-00・795-00などのように、土壌の中から石鏃や石庖丁が出土する例もあるが、これらの検出の要因については、叙上の理由のほかに、殊に、石鏃などの場合には、石鏃そのものが人体に射込まれて、それが致命傷となり、やがて人体は、墓墳の中で腐朽して土に帰り、結果、石鏃だけが残存したというケースもありえると考えている。その他、A-1区の土壌6-00出土の「無礎有蓋双孔式」の磨製石剣については、副葬品の可能性が想定されてよい。

土器棺墓の典型としては、A-3区の1020-00がそれに該当するが、石才南遺跡における墓制は、以上にのべたところが普遍的葬制であって、方形冨葬墓などは、当該区では検出されていない。

このように弥生時代中期中葉から中期後半を中心とする時期の、当該区における居住空間である竪穴住居址群ならびに墓制に関わる土墳墓群の実態は、今回の調査によって、かなり明確に把握しうることとなったが、今後の課題としては、今回、見い出せなかった当時の人々の生活を支えた生業の分野（石廂丁の大量の出土と関連して、水田址などの生産空間）を具体的に検出することや、土墳墓の基数に対応する竪穴住居址群（被葬者の数から推せば、棟数は、さらに南北に拡がる筈である）を、さらに総体的な仕方でも新たに検出し、その上で、その変遷過程等を刻明に追究していくことではなかろうかと考えている。

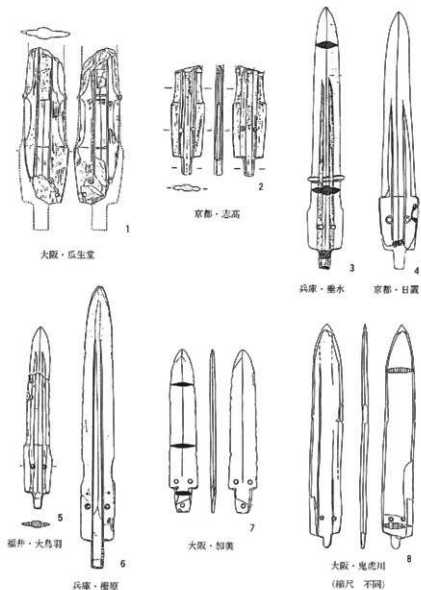
ただ、今般、石才南遺跡の発掘調査に従事して、きわだった成果として、特に強調しておきたいことは、殊に、出土遺物の中において、石鏃・石槍・石剣など、石製武器の存在が、きわめて顕著であるという点である。報告書の中では、そのうちの主要なもの（但し、完形品も破損品も、共に歴史的意味づけにおいては、等しく重要である）だけを、えらんで掲載しているが、それでも、少なくとも石鏃84、石槍4、打製石剣4、磨製石剣1は数えており（ちなみに石廂丁34、太型蛤刃石斧4、柱状片刃石斧4、石鏃10である）、他に破損度の高い遺物を含めると、これらの数値の、優に2～3倍の量の石製武器が出土していることになるであろう。

わたくし自身は、石才南遺跡におけるこれら大量の石鏃（その殆んどが、凸基有茎式のタイプである）を中心とする石製武器の盛行と、土器によって知られる遺跡の年代が、丁度、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式期にあてはまること、そして、丁度、その時期に符合もしくは後続する、今までに調査した堺市菱木下遺跡や和泉市和氣遺跡、そして有名な高地性集落のひとつである和泉市観音寺山遺跡などにおける調査成果とのトータルな関連から、当該遺跡が中国の史書である『後漢書倭傳』や『梁書諸夷傳・倭』の叙べる「倭国大乱」と、深くかかっていると見なしている。「倭国大乱」そのものに関する最近の研究動向としては、『高地性集落と倭国大乱』（小野忠恵博士退官記念論集 雄山閣 1984年）や森岡秀人氏による「高地性集落論」（『論争・学説 日本の考古学』4 弥生時代 雄山閣 1986年）、拙稿「新邪馬台国論—女王の鬼道と征服戦争」（『歴史における政治と民衆』日本史論叢会 1986年）などがあるので、参照されたい。

さて、石製武器のでたところで、もうひとつふれておく必要があるのは、A-1区の東

端土墳6-00から出土した「磨製石剣」（図版105-33・113-9）についてである。

「磨製石剣」は、通常、1)有樋式、2)有柄式、3)鉄剣形、4)変形鉄剣形、5)石戈形などの種類に分類されるが、石才南遺跡出土の磨製石剣は、基本的には、今述べたう



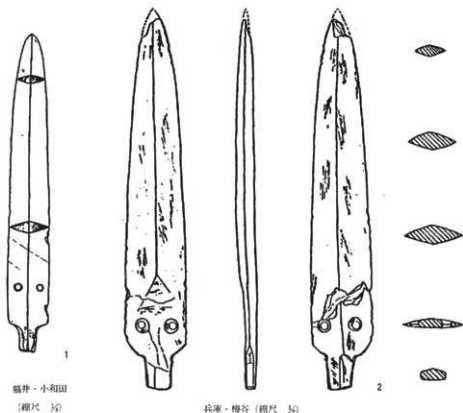
第79図 銅剣形石剣・銅剣・剣形木製品

ちの「鉄剣形石剣」の型式に近いものの、樋をもたず、茎をもち、胴部上方に仿製の銅剣や有樋式石剣と同様の双孔をもつことに、もっとも大きな特徴のある石剣である。「無樋

有茎双孔式」磨製石剣と呼ぶ理由は、まさにこの特徴のためであるが、おそらく系譜的には、「銅剣を模倣した磨製石剣」として位置づけした方がよいであろう。

今回発見された磨製石剣は、剣先から剣身の上半部までが欠損していたものの、残存剣身長9.3cm、剣身最大幅3.5cm、同厚さ0.8cm、茎長2.7cm、同幅1.3～2.0cm、同厚さ0.8cmを測る。材質は、黒色粘板岩製で、「無礎有茎双孔式」の特徴を最も端的に示した、精美的な、数少ないこの種石剣の好例である。

従来の発掘調査の中での、「磨製石剣」そのものの検出例は、決して少なくはないが、たとえば、「有礎式」の磨製石剣の類例としては、大阪の瓜生堂遺跡、京都の志高遺跡・日置遺跡、兵庫の垂水遺跡・標原遺跡、福井の大鳥羽遺跡出土の諸例を挙げることができるし、一方、「鉄剣形」の磨製石剣の出土例としては、大阪の池上遺跡・四ツ池遺跡・瓜生堂遺跡・鬼虎川遺跡、京都の神足遺跡・由良川遺跡、滋賀の膳所本町遺跡・針江南遺跡



第80図 「無礎有茎双孔式」磨製石剣

出土のものなど、数多くの諸例を挙げることができる（第79図-1~6）。

但し、石才南遺跡で出土した「無樋有茎双孔式」の磨製石剣と同タイプの石剣という、
叙上の有樋式石剣および鉄剣形石剣ほどは、その出土例は、多くないと思われる。兵庫の
梅谷遺跡、福井の小和田遺跡、大阪の国府遺跡、京都の中久世遺跡、滋賀の下之郷遺跡、
鳥取の斎尾遺跡などにその出土例があるが、これらの中で、特に完形に近いものは、昭和
29年（1954）に兵庫県飾磨郡夢前町梅谷で採集された一例の報告と、昭和46年（1971）に
福井県若狭高浜町小和田遺跡から出土した、石戈と共伴した磨製石剣の例など、ごく限ら
れている。（第80図-1・2。なお、兵庫・梅谷例については、山本三郎氏「兵庫県飾磨
郡夢前町出土の磨製石剣」『古代学研究』所収 1983年12月、福井・小和田例については、
「大鳥羽遺跡Ⅰ」福井県上中町教育委員会 1984年3月を参照されたい）。また、参
考例として、石剣ではないが、「無樋有茎双孔式」の形式をもつ他の類例として、大阪市
加美遺跡出土の銅剣の一例と東大阪市鬼虎川遺跡出土の剣形木製品の一例とを挙げること
ができる。前者は、1976年11月~1977年3月にかけて実施された調査の中で、調査地Aに
おいて、庄内から布留にかけての溝の中から銅鐵3点と共に出土した銅剣であり、一方、
後者は、1976年3月~5月の第4次調査において、第Ⅱ~Ⅳ様式期の包含層内から出土し
た剣形木製品である。特に後者の資料などは、時折、展開される有樋式の銅剣形石剣や鉄
剣形石剣は実用であるけれども、他方、無樋の有茎双孔式の石剣は祭祀用であるとの、一
見もっともらしい論議に対する反証材料として、機能しているように思われる。すなわち、
概念の上で相対峙するのは、「銅剣形石剣」と「鉄剣形石剣」の概念ではなく、「銅剣形、
もしくは鉄剣形石剣」と「剣形木製品」との両概念であるとするのが、ここで提起してお
きたい見方である（第79図-7・8）。

いずれにせよ、石才南遺跡出土の「無樋有茎双孔式」の磨製石剣は、私見によれば、他
の石製武器と同様、実用の殺傷能力をもつ武器であり、それが攻撃用として用いられたか、
それとも防衛用として用いられたかは別として、人が人にむかって照準を定め、矢を放ち、
槍で突き、至近距離に至っては、相手のふところにとびこんで剣で刺し殺すといった突戦
に用いられた武器であることは明白である。戦争は、その人のもつ人格・資質・個性・才
能、そして健全な人間の紐帯および諸関係を、一時の欲で、すべて全面的に打ち砕き否定
する、非生産的な行為である。戦争を惹起した者はともかくも、彼ら「カインの末裔」に
よって、抵抗のすべもなく、「聖戦」という名の場の中にほうりこまれた老人、若者、乙
女、小さな子供たち、そして婦女子たちは、いずれの時代の人々についても同様であるが、

「歴史に翻弄された人々」として、哀れである。

<古墳時代>

このように、弥生時代中期中葉から後半の時期あるいは、後期前半の時期にかけては、この地は、通常の生活形態を破壊されて、一時、戦鬪的性格を濃厚におびる軍事的集落に変容したが、その後、弥生時代の後期後半から古墳時代の前期の時期にかけては、当該地における生活痕跡は、ぶつりと消えてしまうことになる。そして、この地が再び、生活空間として、急速に活性化しはじめるのは、古墳時代中期以後のことである。本論の中においても述べたように、特に、A-1区からA-3区、そしてB区の範囲は、古墳時代中期末から後期の時期にかけての、一大集落の中心地である。人々の居住に関わる遺構としては、竪穴住居址3棟(402-OD・210-OD・855-OD)と掘立柱建物跡が9棟(1200-OB~1208-OB)ほど検出されているが、その中で、竪穴住居址402-ODは、5世紀末葉から6世紀前半にかけての建物、1201-OBは5世紀末葉から6世紀初頭にかけての建物、1206-OBは6世紀前半の建物、1205-OBは6世紀前半から6世紀中葉にかけての建物であることが判明している。そして、竪穴構造をもつ住居址から、掘立柱建物への大々的な移行・変遷の時期は、丁度、5世紀末葉から6世紀前半にかけての頃のことであること、そして、竪穴住居址の軸角は、402-ODや210-ODやに示されているように当初、規格性に則っていなかったが、それが竪穴住居址・掘立柱建物跡双方ともに、同一の軸性をもつようになるのは、竪穴住居址で言えば、855-OD以後、掘立柱建物跡で言えば、1201-OB以後、すなわち、5世紀末葉以後6世紀初頭前後であることなどが判明した。なお、この軸性は、その後、当該地では、古代・中世・近世へと継承されていく伝統的・保守的な軸性であり、条里起源の問題を考えていく上でも重要な素材である。

また、A-3区などでは、掘立柱建物群(1201-OB・1202-OB・1204-OBなど)を、同一軸角で圍繞する溝状遺構1001-OSや1002-OSなどが検出されているが、これらも、掘立柱建物群を周辺と明確に区画するというその機能において重要である(和泉市所在の和気遺跡などでも、6世紀後半から7世紀代にかけての掘立柱建物を取り囲む「区画溝」が検出されている)。

他方、古墳時代の墓としては、丁度、これら建物の時期に近似する、約40基の土壌墓が検出されている。その殆んどは、時期明確な遺物を伴わない土壌であるが、B区の766-OO・767-OOなどのように、土壌内部に須恵器坏身・坏蓋の副葬・供献を伴うもの、他

方、2018-00のように、土壌外傍に須恵器坏身の随伴のみられるものなどが検出されている。これら墓葬に関する副葬および供献のあり方（たとえば、767-00の場合、土壌底部から出土した須恵器坏身と、土壌埋土の上層から出土した須恵器坏身との間には、明瞭な型式差と時間差がみとめられたという例）から推して、当時の死生観であるイモータリティの観念や、或いは、先祖崇拜の観念などをおこすこともできる。また、よりトータルなかたちでは、近くの国の指定史跡である前方後円墳「丸山古墳」が存在している（図版3）ので、その造営主体である首長と石才南の集団との関わりを迫ることや、加えて、水田址など、生業に関わる生産空間の検出をおこなうことなどが、今後の課題となる。

<古代・中世・近世>

石才南遺跡において、C区以東においては、遺構・遺物の検出量は、きわめて僅少となる。C・D・E区においては、2間×3間の掘立柱建物跡（2096-0B）の他、中世の土壇墓（2056-00・2059-00・3000-00・3003-00）、中世の水田畦畔（2005-0Z）、中・近世の貯水施設（2002-0I・2003-0I）・溝状遺構（3010-0Sほか）・犁溝（4000-0Z・5000-0Z）・井戸（4002-0W）・田畑（5001-0Z）などが検出されており、さらに東方のF・G区においては、自然河川（6003-0R）や中・近世の溝状遺構（7004-0S）、そして調査区東端の、清見遺跡にもっとも近いH区においては、同じく、中・近世の犁溝（8005-0Z）が検出されている。

このように、C区からH区に至るまでの範囲は、その殆んどが、中・近世の生業の場であることを明らかにしており、検出された遺構は、おおむね、水田や田畑の経営に係る耕作関連の遺構であるということになる。この生産空間に付随する居住空間は、恐らく、水間街道周辺に密集して存在している、現在の集落と一定程度の重複を有しているものと予測されるが、その実態の解明については、今後の調査の成果の蓄積と解析に待つしかないのであろう。

以上で、昭和61年度・62年度の二ヶ年にわたって実施された、石才南遺跡の発掘調査報告を終えることにする。

（完）

付章Ⅰ 「石才南遺跡の暦年代」

一貨泉による畿内第Ⅴ様式土器・

1世紀前半開始説への疑問一

1. はじめに

本稿では、「石才南遺跡の暦年代」と題して、既往の、あるいは現行の、弥生土器の推定暦年代観について、検討を加える。付章において、あえてこの点を補足するのは、本稿において、石才南遺跡は弥生時代中期中葉から中期後半（畿内第Ⅲ～Ⅳ様式期に該当）にかけての、戦鬪的性格をおびた主要な軍事的集落のひとつであることを論じ、しかもその遺跡の性格については、それを中国の史書である『後漢書』の叙べる「桓（147-167 A. D.）霊（168-188 A. D.）間、倭国大乱、更相攻伐歴年無主」なる記事、あるいは『梁書』の言う「漢靈帝光和中（178-184 A. D.）倭国乱、相攻伐歴年、乃共立一女子卑彌呼為王」なる記事の中の、いわゆる「倭国大乱」との関連でとらえたのであるが、その理由は、弥生土器の暦年代について、田辺昭三・佐原眞氏らの「倭国の大乱（A. D. 180前後）を第4様式末」、³¹「畿内第5様式を卑彌呼の時代から古墳の成立におよぶ約100年間」に比定する立場、³²或いは石野博信氏の「近畿第Ⅳ様式を佐原・田辺説を踏襲してA. D. 180年頃に置き」、³³「後続するⅤ様式（4期に分類）の後期1をA. D. 180-230年頃におく」立場、³⁴或いは丸山竜平氏の「実年代を二世紀末葉から三世紀前半代のおよそ50年ほどと考え、第Ⅴ様式の終末を卑彌呼没時から尙と獨立実現までの250年代に想定す³⁵る」立場に近似した視点で、わたくし自身論じているからに他ならない。

但し、他方において、近年、若手の研究者たちの間から、叙上の暦年代観に対する批判が提起されつつあり、殊に、畿内第Ⅴ様式の実年代に関しては、そのはじまりの時期を、九州における後期の暦年代観とほぼ同様に、貨泉との共存関係を基調に、寺沢薫氏の如く1世紀の第3四半期にまであげる考え方、³⁶或いは森岡秀人氏の如く、1世紀前半にまで遡及させる考え方³⁷などが披瀝されており、ここに畿内における弥生後期の概念は、その開始期に関し、おおよそ130年前後のずれを伴うという、大きな混乱を来しつつあるというのが現状である。本稿では、これら両説の是非を問うべく、従来の「貨泉」による土器の年代決定法に関し、果して方法的な問題点が内包されていなかったかどうかを吟味すると同時に、推定暦年代をより正確なものにしていくために、今後、どのような方向性でこ

の問題を考えていくことができるのか、その点を模索していきたいと思う。

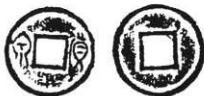
2. 貨泉出土遺跡と暦年代決定法

弥生土器の実年代を決定していく上で、貨泉の果す役割がいかに大きいものであるかは、今さらあらためて言うまでもない。この点は、言わば学界の共通認識であり、そのことは、たとえば、『図解 考古学事典』の中における岡崎敬氏の「貨泉…新の王莽が天鳳1年(14)貨布とともに鑄た貨幣。五銖銭よりやや小さく径2.35cm、表に方郭をはさんで右より『貨泉』の2字を入れる。…日本では長崎県杵岐郡田河町原ノ辻、福岡県糸島郡志摩村御床松原、京都府熊野郡久美浜町函石浜、大阪市東住吉区瓜破大和川床遺跡などで弥生式土器とともに発見されている。これは中国文化の東方波及をしめすのみならず、弥生式文化の年代を推定するうえに重要な資料である。

後漢の光武帝は王莽の貨幣を一律に廃止し、「五銖銭を用いた」という貨泉説明の中に、端的にあらわれている。

勿論、わが国における貨泉資料は、その後、数を増しており、この説明の時点から約20数年を経た今日においては、上述の資料のほかに、長崎対馬シゲノダン(1969)・佐賀県北方町東宮裾(1982)・佐賀県武雄市小楠(1982)・福岡県浮羽郡浮羽町御幸中学校(1982)・熊本県菊池市長田外園(1983)・広島県福山市津之郷町本谷(1954)・大阪府八尾市亀井町亀井(1980・1983)・大阪府東大阪市巨摩庵寺遺跡(1982)出土の諸例を加えており、他方、寺沢薫氏も、日本出土の弥生(古墳)時代の中国銭貨をまとめた中で、上述の類例のほかに、福岡県直方市感田西前田(1920)・宮崎県宮崎市曾井古墳(1919)・京都府京都市左京区幡枝町・長野県岡谷市天竜町青松海戸(1931)、そして、大阪府貝塚市沢瀬池遺跡出土の貨泉(1984)などを紹介している。

但し、これら貨泉資料の出土の仕方は実にさまざまであって、たとえば、福岡西前田・



福岡県御床松原遺跡出土貨泉



長崎県シゲノダン出土貨泉



京都府函石浜出土貨泉

第81図 御床松原・シゲノダン・函石浜出土貨泉

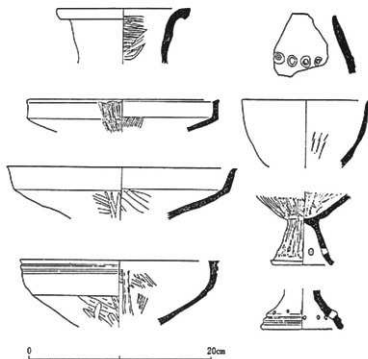


第82図 貝塚市所在・
源池遺跡出土貨泉

京都兩石浜例は表採資料、長崎原ノ辻・熊本外園・広島木谷・長野青松海戸の諸例は、包含層出土、宮崎曾井例は後期古墳からの出土、そして、大阪源池遺跡出土の貨泉の場合は、中世の混入物であるなど、遺構の年代は、必ずしも貨泉の年代と合致しているわけではない。

他方、大阪府下出土の貨泉で、弥生時代の遺構と密接に関っているのは、亀井・巨摩庵寺・瓜破の三遺跡出土の貨泉であるが、実はこれらの遺跡から出土している「貨泉と弥生土器との共存関係」が、言わば、主たる根拠となっており、「畿内第V様式土器・1世紀第2～第3四半期開始説」が登場してきたわけである。以下においては、その論拠の展開を分析すると同時に、その立場の限界点に言及したい。

3. 「畿内第V様式土器・1世紀第2～第3四半期開始説」の立論構造



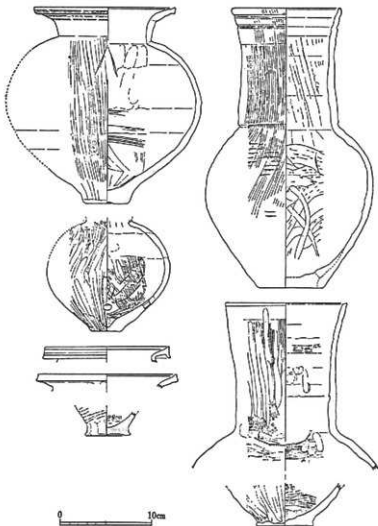
亀井遺跡 H-3 地区 SK3004 出土の貨泉伴出土器（『亀井・波山』より）

第83図 亀井遺跡 貨泉伴出土器

畿内第V様式期の開始年代を、1世紀前半、もしくは1世紀の第3四半期に位置づけているのは、先程少しふれたように、森岡秀人氏と寺沢薫氏である。先ず森岡氏の説からみるのに、氏は、前掲論文「大阪湾沿岸の弥生土器の編年と年代」の中に「貨泉・小型仿

製鏡などに基づく畿内第V様式の年代」なる一項を設け、その中で、「弥生時代のカレンダー・イヤー」に基点を定めるに最も有効な資料として、中国での鋳造年限が非常に短く、はっきりしている貨泉がしばしば取りあげられてきた。新の王莽の天鳳一年（A.D.14）、貨布とともに鋳られたが、日本での舶載品は現在17枚を算し、大阪湾沿岸では伴出した弥生土器の時期が載然とするものが三遺跡六枚を数える」ときりだし、以下、亀井・巨摩庵寺・瓜破遺跡からの個々の貨泉の出土例に言及しながら、論をすすめておられる。すなわち、「大阪府八尾市亀井遺跡では四点出土している。うち一点はH-3地区土坑SK3004の第一層の中粒砂から検出をみ、図に示した土器を伴っている。時期はIV様式～V様式初頭であるが、貨泉の出土層位が最上層であることにより、伴存可能年代の上限を一応V様式の初期とみておきたい。基準法量よりも径・重量ともに大形である。あとの三点は近畿自動車道関係の発掘資料で、すべてBトレンチf9区の第VIIIb層内から出土している。径は規格に近似するが、重さは軽すぎるという。伴出した土器は第V様式後半が中心である。

大阪府東大阪市巨



巨摩庵寺遺跡後期V(Ⅱ)面相当の貨泉伴出土器(『巨摩・瓜生堂』より)

第84図 巨摩庵寺遺跡 貨泉共伴土器

摩庵寺遺跡では、『後期第2号方形周溝墓を壊して流れる自然河川の西側肩より二メートル離れて、貨泉と菱形土器を検出』、出土層位は『後期Ⅴ(Ⅲ)面に相当する』と報告されている。伴出土器は第Ⅴ様式初頭とみて大過ない。…



第85図 瓜破遺跡出土貨泉

大阪府大阪市平野区瓜破遺跡からは新旧二点の資料が発見されている。最近の出土資料は歴史時代の遺物と混在していたため使えないが、馬野繁蔵採集品は畿内第Ⅴ様式に伴出したという」とのべて、これらの貨泉と弥生土器との共伴関係から、「列島における貨泉の伝来を仮に超スピードなものとし、その受容のいま一つの門戸(母体)が大阪湾沿岸を中心とする畿内の地にあったなら、第Ⅴ様式の上限年代の可能性を西暦一世紀の前半の内に求めることを否定はできないであろう」との結論に到達している。

他方、寺沢薫氏は、論文「弥生時代舶載製品の東方流入」の中で、「中国銭貨」の項を設け、同じく、亀井・巨摩庵寺・瓜破の三遺跡における、貨泉の弥生土器の共伴関係に検討を加えている。論の立て方は、森岡氏の方法と近似しているが、亀井遺跡Bトレンチ「9区Ⅷb層出土の土器を、報告者は第Ⅴ様式後半にしているのに対し、氏は第Ⅴ様式前半に位置づけている点と、そして、貨泉そのものに関し、中国における説志強・謝世平などの「貨泉初探」の成果を採用しながら、その分析をすすめたという点で、若干の相違なり、進展がある。すなわち、寺沢氏は、個々の貨泉について、「亀井ポンプ場内(SK3004)出土の一枚は、径2.27cm、3.75gとずっしりとして鋳上りもよく、内郭、外郭ともにシャープで、最近の中国での分類の第1類に相当し、王莽元鳳年間前半の製作になる公算がつよい。他の三枚は明らかに製作年代にひらきがあり、一枚は面に内郭を欠き、肉は薄いために穴があきかけている。鋳上りも悪く第Ⅲ類の後漢初期の製作であろう」、また巨摩庵寺遺跡の「貨泉は径2.3cm、1.3gと軽くて薄い。面内郭は確認が困難で鋳上りも悪い。背穿左上決文らしき痕跡があり、第Ⅲ類、後漢初期に下る資料と考えたい」、そして、瓜破遺跡の「貨泉は径2.15cm、1.55gと軽く、内郭を欠き、穿上半星の記号をもつ。第Ⅲ類、後漢初期の製品であろう」と述べて、三遺跡出土の貨泉は、「後漢初期に下る資料は多いが、中期以降に下りうる例はない」とし、結論としては、「おもに中国鏡や銭貨の年代観から、畿内第五様式の開始の実年代を西暦一世紀の第3四半期頃、その終焉(第五様式5)を西暦三世紀の第1四半期のなかで考えることができる。この考えは筆者のいう畿内古墳

時代の開始（第五様式6＝纏向一式）を三世紀の第2四半期で考え、庄内式をへて完成されつつある古墳時代（布留0式）の年代を三世紀末にさかのぼらせて考える点で、古墳時代の開始と実年代観を少なからず遡上させることになるが、弥生時代後期の開始年代については、土器様式との『後期』開始の若干のずれを考慮すれば、早くに中国鏡式の組み合わせから実年代算定の方法を確立していた九州実年代観にほぼ適合するものと考えている¹⁰とむすんでいる。

以上に紹介したところが、「畿内第V様式土器・1世紀第2～第3四半期開始説」の立論構造である。

4. 「王莽貨泉」伝世論

但し、上述の森岡・寺沢両氏の所説が成立するためには、ひとつの前提を必要とする。それは、貨泉の中味をほぼ「王莽貨泉」にのみ限定し、しかも、その鑄造から流入、そして遺構への埋没もしくは埋納に至るまでの「伝世期間」を、殆んど捨象して考えるか、あるいは限りなく短期のものとみなして立論するという、言わば「方法的」前提である。

この前提に対する警鐘もしくは慎重論の提示は、いち早く（先程の寺沢・森岡両氏の説に先行して）岡崎敬氏と菅谷文則氏とによってなされていたが、その実例に基づく論旨の展開は、おのおの以下のようなものであった。

先ず、岡崎氏は、「日本および韓国における貨泉・貨布および五銖銭について」なる論文の中で、「日本では王莽新代の貨幣、貨泉や貨布が発見されることがある。これが一括多量に出土した場合、上限を新代におくことができようが、一枚もしくは数枚といった場合、相当慎重でなければならないのである」ときりだし、日本・韓国における貨泉・貨布・五銖銭等の出土実例を仔細に検討したあと、次のように結論しておられる。

「『貨泉』の分布は、東は日本より、西は新疆ウイグル自治区に及んでおり、それを出す漢墓はおおむね後漢代のものが多いが、貨泉、大泉五十を出土しても次のように、六朝代に下るものがある。貨泉などの王莽代の貨幣を出土しても、東晋や北魏時代まで伝世することを示し、中国においても、他のものとの共存関係にも慎重な注意を要するのである。」

次に菅谷文則氏の論説であるが、氏の場合も、ほとんど岡崎氏と同様の視点に立って、特に「洛陽燒溝漢墓」の調査成果等をふまえながら、「王莽貨泉」伝世の実例に人々の注意をひいている。すなわち、「…王莽治世（後9～23年）のわずか14年間の短期間に鑄造された銭貨は、短命王朝が鑄造した銭貨であるゆえに、考古遺跡の年代を決めるのに役立つ

河南省徐州市雲龍泉	北魏	「大泉五十」3、「永安五銖」65	文参 1955-3
江蘇省丹徒縣高資公社	東晋	半兩、五銖、大泉五十、契刀五百、貨泉、布泉、豐貨	文参 1978-2
安徽省霍邱縣崗鄉	漢末~六朝初年	半兩、五銖、貨泉、大泉五十	文参 1958-1
“ 蕉湖市赫山	吳~東晋	半兩、五銖、貨泉、大泉五十	文参 1956-2
浙江省紹興縣香花園	六朝	三十三万(九九八斤)、半兩、大泉五十、貨泉	考古 1980-6
寧夏回族自治区銀川	東晋	半兩、五銖、大泉五十、貨泉	考古 1966-2

つとされてきた。とくに地皇元年（後20年）、または天鳳元年（後14年）以降に鑄造された貨泉と貨布はわずか10年前後の短期間の鑄造であり、かつ後漢王朝が王莽の諸制度を廃したことから、考古遺跡の年代決定にほぼ絶対的な根拠となるものとされてきた。…

中国の遺跡での王莽銭のあり方はどうかを検討しよう。後漢の首都である洛陽では洛陽燒溝漢墓の資料がある。その分類の第三期後期（王莽代とその直後の後漢）の22基の墓のうち21基から王莽銭が出土し、そのうち15基は前漢の五銖銭と共伴し、王莽銭のみを出土するものは6基にしかすぎない。第四期（後漢早期）の8基の墓のうち3基から王莽銭のみが出土し、3基から後漢の五銖銭のみが出土する。王莽銭と後漢五銖銭の共伴する2基ではおのおの294枚、178枚中に1枚の王莽銭を含む。1004A墓では、王莽銭のみ19枚を副葬する。五期（後漢中期）の10基のうち、7基から王莽銭が出土し、そのすべてが後漢五銖銭を共伴する。六期（後漢末）の11基のうち8基から王莽銭が出土し、そのすべてが後漢銭と共伴するが、後漢銭の比率が高い。これからいえることは、後漢の首都周辺であっても後漢中期までは大量の王莽銭が使用・流通していたことを示す。小鹿原の4基の小型漢墓では、後漢末期の墓60から重さ1.4g r と軽い貨泉が出土しているのが注目され、最近、大部の報告書が出版された広州市の漢墓でもほぼ同様の傾向をみることができる。ただ広州漢墓では、後漢の後半にいたってもやや王莽銭の比率が、後漢の五銖銭に比べてたかいことが注目されよう。

三国時代の墓からも王莽銭は出土する。洛陽晋墓として報告されている54基の晋墓から、併せて2060枚の銭貨が出土した。その内訳は、半兩19・五銖1969・大泉五十9・貨泉52・大泉当千4・直百五銖4・太平百銭1・定平一百1と報告されている。つまり三国をへて晋代にいたっても、約3%の比率で貨泉や大泉五十が流通していた。東北地方、遼寧省遼陽市三道壕からも、王莽代の貨泉・大泉五十が出土しており、他の報告例からも、ひろく中国各地の晋とそれにつづく時期の墓でみられる現象といえよう」と述べて、「王莽貨泉」が出土する遺跡の年代は、（他の共伴遺物との関連で考える時）単に王莽代から後漢初期

の間にのみ限定されるものではなく、後漢早期・後漢中期・後漢後期・後漢末期・三国・晋、あるいは、それ以降の時代にまで及んでおり、従って、「王莽貨泉」自体の伝世は、考古学的方法によって立証される、無視しがたい帰結であることが指摘されているわけである。

このようにみえてくるならば、果して、貨泉そのものの年代をもって、共伴土器の曆年代をストレートにおこしてよいものかどうか、具体的に言えば、先にあげた大阪府下の八尾市亀井遺跡・東大阪市巨摩庵寺遺跡・大阪市瓜破遺跡の出土土器などの年代を、即、貨泉の年代（それらは、殆んど「王莽貨泉」とみなされている）にまでひきあげてよいものかどうか、とりわけ、これら三遺跡の場合、貨泉の伝世的要素を捨象してよいとする明確な論拠が提示されていないだけに、畿内第Ⅴ様式土器が、1世紀の第2四半期（前半）もしくは、第3四半期には始まっていたとする考え方には、俄には承服しがたい。

なお、この点とも関連して、従来の「貨泉論」には、総体として、ひとつの見おとされたい難点が内在するので、次項において、この点についてふれておきたいと思う。

5. 「単一貨泉論批判」－王莽貨泉・光武貨泉・私鑄貨泉－

従来の「貨泉論」の中で、看過されてきたひとつの難点とは、貨泉をあまりにも、単一的に論じすぎたという点である。貨泉そのものを見直すために、最初にふりかえておきたいのは、中国史書の中における貨泉記事である。

貨泉に関する記事は、先ず『漢書食貨志』の中において、「後五歳、天鳳元年（14A. D.）、復申下金銀龜貝之貨、頗増減其賈直。而罷大小錢、改作貨布、長二寸五分、廣一寸、首長八分有奇、廣八分、其闊好徑二分半、足校長八分、間廣二分、其文右曰『貨』、左曰『布』、重二十五銖、直貨泉二十五。貨泉徑一寸、重五銖、文右曰『貨』、左曰『泉』、枚直一、與貨布二品並行」とあり、また『漢書王莽傳』の中では、「是歲（地皇元年=20A. D.）、罷大小錢、更行貨布、長二寸五分、廣一寸、直貨錢二十五。貨泉徑一寸、重五銖、枚直一。兩品並行」と記して、天鳳元年（14A. D.）に第四次幣制改革が宣布され、6年を経た地皇元年（20A. D.）には、貨泉と貨布の二品並行が完全実施されていたことを伝えている。

続く『後漢書光武帝紀』の中では、その十六年（40A. D.）の條で、「初、王莽亂後、貨幣雜用布、帛、金、粟。是歲、始行五銖錢」と述べ、この年、すなわち、西暦40年に、王莽の時に廃止されていた五銖錢が、再び復活したことを伝えている。『漢書食貨志集釈』

によれば、「建武十六年始鑄五銖錢、…在建武十六年以前所用之貨幣、大宗常爲貨泉與大泉五十、不過大泉五十當貶價與貨泉每枚同值一錢」とあり、王莽の死後も、貨泉が大泉五十などとともに流通していた事情を伝えている。

更に、史料としては大分新しくなるが、『晋書食貨志』においても、「至光武中興、除莽貨泉。建武十六年、馬援又上書曰：『富國之本、在於食貨、宜如舊鑄五銖錢。』帝從之。於是復鑄五銖錢、天下以爲便」とあり、後漢の光武帝の時代に王莽の貨泉が除かれ、「富國の本は食貨にあり」とのことで、五銖錢の鑄造が、再び始まったことを伝えている。

以上が、中国史書からみた「貨泉」記事の概要であるが、問題は、果して、貨泉は（というよりも、厳密には「貨」・「泉」という二文字を鑄する貨幣は）、多くの先学が考えてきたように王莽（45B.C.～23A.D.）没後、直ちに鑄造を停止し、以後、再び鑄造されることのない貨幣として、言わば「短命王朝が鑄造した錢貨であるゆえに、考古遺跡の年代を決めるのに役立つ」特定規準として認めてよいのかどうか、それ程までに高い確度をこの「貨泉」に附与してよいのかどうかという点である。何故ならば、上述の史料からおこせることは、あくまでも貨泉は、①王莽の天鳳元年（14A.D.）からはじまる第四次幣制改革の中で鑄造を開始し、②地皇元年（20A.D.）にはその改革が完全実施を見、③地皇四年（23A.D.）の王莽の死後も流通が続いて、④光武帝の建武十六年（40A.D.）に至って、五銖錢の復鑄がはじまったということを伝えているにすぎないからである。

それでは、『晋書食貨志』の中に記されていた「至光武中興、除莽貨泉」なる記事は、いったいどのように解されるべきであろうか。

その点に答える前に、わたくしたちは、中国人学者である戴志強・譚世平氏らの貨泉研究の成果に注目せざるを得ない。その精緻な研究については本篇に譲るとして、ここで、論旨との関連で是非とも扱い、評価しておかなければならない点は、両氏が、河南安陽所在の窖藏から出土したとされる約3245枚におよぶ「貨泉」を大きく三つのグループに分類し、第Ⅰ類を「内郭、錢面重好、錢背四決。外郭、錢面均爲外高内下、成斜坡形、有的斜坡中間略微下凹；錢背外郭凸起、郭面與地張呈平行。『貨泉』兩字…懸針篆書體工整。…」の貨泉、第Ⅱ類を「大部分錢還相當精整。…最大變化是、內郭重好消失了。…外郭也開始不完全採用外高內下型、…開始減重…」の貨泉（傳書錢・復書錢・錯范錢・一面一字錢・記号錢・穿穿錢などを含む）、第Ⅲ類を「錢面無內郭、只有錢背有內郭…外郭的製作和第Ⅱ類基本相似…但輪郭一般不及第Ⅱ類深峻。『貨泉』兩字亦爲懸針篆體、但書寫千姿百態…第Ⅲ類貨泉錢几乎都是記号錢。…如穿上半星、穿下半星、穿上左决文、穿下右决文等々

…」の貨泉と、おのおの分類した点、また、発見された「貨泉」は、実は官鑄銭だけではなく、当時、官の規制をのがれて秘かに鑄造された私鑄銭をも含んでおり、その率は、第Ⅰ類においては僅かに1.65%にしかすぎなかったものが、第Ⅱ類においては「猛増」して25.3%、第Ⅲ類においても、24.7%ときわめて高率であることを指摘している点、更に大切なこととして、王莽の死後、貨泉が直ちに廃されたわけではなく、次の光武帝の治世中(25～57A.D.)になっても、ひき続き貨泉は鑄造されつづけていた事実を、光武帝自身の思想的背景をおこしつつ指摘している点である。

この点については、先に丁福保氏が『古泉学綱要』(1940年)の中で、「后漢錢制凡三變、一日貨泉、光武酷信讖緯、新莽貨泉為『白水真人』之兆、故不惟不除貨泉、且新鑄之而廣布于天下也」と記し、また、彭信威氏が『中国貨幣史』(1958年)の中で、「東漢初期屢使用王莽的貨泉、而且曾鑄造過、劉秀(漢光武帝)很相信讖緯、他起于春陵的白水鄉、貨泉的泉字象征『白水真人』と述べたところでもあるが、その考釈の祖型は、『御覽資産部』引、應劭の『漢官儀』の中の「王莽篡位、以劉字金刀、罷五銖、更作小錢、文曰『貨泉』。其文反『白水真人』、此則世祖中興之瑞也」なる記事にもとめられるようである。

いずれにせよ、戴志強・謝世平の両氏も、これらの所説をひきつぐ立場にあり、「莽亡前後、到東漢建武十六年、貨布停鑄、貨泉却繼續鑄行、傳說劉秀相信讖緯、因他起于春陵白水鄉、貨泉的『泉』字、象征白水真人、所以劉秀要得天下、当然這只是一種托辭而已…」と述べて、建武十六年(40A.D.)に「貨布」の鑄造は停止されたものの、一方の「貨泉」はそれとは逆にひき続き鑄造され続け、その理由はと言えば、当時「貨泉」そのものの二文字を左右逆に「泉貨」の順序に読み、しかも、そのおのおのの「泉」字・「貨」字を上・下・左右に分離して読む「白水真人」説が登場し、その「白水から真人が起る」(「『真人』とは、基本的には、『道』の根源的な真理を体得した人」、のちほど宗教的な意味をおびて、「天上世界の最高神」、あるいは中国人によって、その相似形と考えられていた「地上の人間世界の帝王」の意である)との解釈が、自身、白水郷から起り同時に熱心な讖緯思想の推進者でもあった光武帝をよろこばせることとなって、「貨泉」は、その後も「繼續鑄行」されることになったのである。戴志強・謝世平の両氏は、上述の第Ⅲ類の貨泉を「光武貨泉」として位置づけているが、果して第Ⅰ類を天鳳元年に鑄造の始まった貨泉、第Ⅱ類を天鳳后期から地皇年間にかけて鑄造された貨泉、そして、第Ⅲ類を建武十六年前後に到る「光武貨泉」であると固定してよいかどうかは別問題であるとしても、「貨泉」そのものを、従来の如く、「王莽貨泉」の視点から捉えるだけでは不十分であり、今

まで検討してきたように、少なくとも「光武貨泉」・「私鑄貨泉」(雜銭)のカテゴリを加えて、言わば「総体的な」貨泉観の中で、その個別資料を位置づけていくことは大切な手続きであり、視点である。そして、このような視点に立つ時、先程の『書言食貨志』中の「至光武中興、除莽貨泉」なる一文も(この記事が、一定の信憑性を有すると判断する時)、ここで伝えているのは、あくまでもその「莽」字が特定しているように、「王莽貨泉」の排除のことであって、「光武貨泉」を含む貨泉全般を否定した記事ではなかったことを知るのである。そうであってみれば、わが国における、畿内第Ⅴ様式の暦年代を考える場合にも、貨泉を、ただ安直・安易に、新代の「王莽貨泉」であるのみ早計に判断して論をすすめていくことは、学問的には、きわめて危うい手続きと言わざるを得ない。従来、「貨泉」をすべて単一的に「王莽貨泉」とみなして論をすすめてきた「単一貨泉論」への検討を促すこと、これが拙稿のさしあたった役割にほかならない。

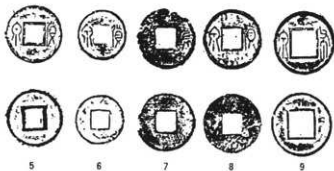
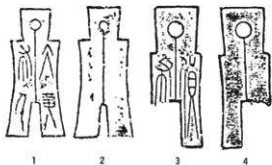
6. 今後の課題と展望—むすびにかえて—

さて、以上にのべてきたように、畿内第Ⅴ様式土器の暦年代、とりわけ、その開始期に関する暦年代観については、田辺昭三・佐原眞・石野博信・丸山竜平氏らの如く、それを中国史書との関連で、ほぼ180A.D.前後におく立場と、森岡秀人・寺沢薫氏らの如く、畿内第Ⅴ様式土器と貨泉との共伴関係に注目することによって、それを1世紀第2四半期(前半)もしくは第3四半期におく立場との、大きく二つの系流をみたのであるが、岡崎敬氏や菅谷文則氏らが、実例をもって明らかにしたように、韓国あるいは中国における貨泉出土のあり方は、必ずしも、新代の遺跡に限定されているわけではなく、洛陽燒溝漢墓、広州漢墓、洛陽晉墓、徐州雲龍泉北魏墓などの諸例が示すように、後漢・三国・南北朝時代に至っても、貨泉は他の新しい要素をもつ文物と共に出土している類例があり、これらの事実は、「貨泉の伝世」を明示する素材であって、こういう類例を普遍的に目にする時、なんら他には年代決定に有効な、複合的共伴関係の認められない状況の中で、果して、貨泉と土器が共伴したという事実のみに基づいて、土器に貨泉の年代(しかも、埋設もしくは埋納時ではなく、鑄造時の年代もしくはその時期に限りなく近い年代)をあてはめてしまってもよいものかどうか、慎重にならざるを得ない。

しかも「貨泉」は、従来、考えられてきたように、年代を局限しうる「新」代の「王莽貨泉」だけに特定しうるものではない。中国人学者である丁福保・彭信威氏らが指摘していたように、「王莽貨泉」のあと、讜緯思想にかぶれ、とりわけ「白水真人説」に心酔し

きっていた光武帝（6 B.C.～57 A.D.）は、その預言を自らに適用して、ひきつづき「光武貨泉」を継続鑄行させし、また、説志強・謝世平氏らの研究によって明らかのように、発見された貨泉の中には、官鑄銭以外に、「猛増」という言葉で表現された多数の「私鑄貨泉」も含まれており、このように、従来きわめて単純に扱われてきた「貨泉」を実態に即して見るならば、少なくとも、「王莽貨泉」・「光武貨泉」・「私鑄貨泉」などの複数の類型から見なければならなくなるのが判明する。とりわけ、貨泉の鑄造の時期等については、王莽・光武帝時の鑄造貨泉以外に、たとえば、「洛陽燒溝漢墓」中の147号墓あるいは、1035号墓の類例に示されているように、後漢の靈帝（168～188 A.D.）・獻帝（189～220 A.D.）の時期にまで下る「翻鑄銭」の存在なども知られており、実態がこのようであってみれば、個々の貨泉について、

それらが未だ大系の中の正当な位置を獲得しないうちに、その時期を安易に特定し、そのことを手がかりにして、土器の暦年代をおこすという方法には、現時点においては、非常に大きな手続上の違和感と抵抗感とを感じざるをえないのである。今後は、「貨泉大系」を構築することなども、年代学を促進させていく上での、不可欠急務の作業のひとつとなるであろうが、わたくしが、本報告の中で、あえて、森岡・寺沢氏による「畿内第Ⅴ様式土器・Ⅰ世紀第2

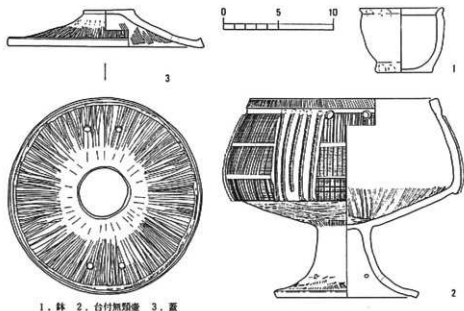


新莽錢拓本

- 大布黄千：1，2。（墓45）
 貨布：3，4。（墓1038）
 貨泉：5，徑2.3厘米（墓38） 6，徑2厘米（墓1003）
 7，8，翻鑄品（墓147，1035）
 布泉：9。（墓21）

第86図 洛陽燒溝漢墓出土 翻鑄貨泉ほか

四半期（前半）～第3四半期開始説」の立場をとらないで、佐原・石野氏による「2世紀末葉開始説」の立場をとっているのには、当然それなりの論拠がある。まず、そのひとつは、1)もし、畿内第V様式の開始期を、1世紀第2四半期（前半）もしくは第3四半期まであげてしまうと、それ以前の弥生時代中期の段階で、「倭国大乱」との関連で伝えられてきた、山口・広島・岡山・香川・兵庫・大阪・和歌山・京都・奈良などに所在する「軍事的高地性集落」そのものが、紀元前の数百年間にわたる戦闘遺跡になってしまい、内容的かつ年代的に、『漢書』・『梁書』などの文献との整合性を崩してしまうこと、また、2)上述のように、「貨泉」そのものは、「王莽貨泉」・「光武貨泉」・「私鑄貨泉」などから成りたっているが、大阪の亀井遺跡・巨摩庵寺遺跡・瓜破遺跡から出土している貨泉は、亀井遺跡の第I類と考えられている1例（但し、伝世の可能性大）を除けば、他は、軽くて薄い、鋳上りの悪い第III類のきわめて後出的な貨泉を主流としており、その年代を貨泉初鋳時に近い1世紀前半にまで遡及させることには無理が伴うこと（私見では、仮説的にはあるが、第I類を「王莽貨泉」、第II類を「光武貨泉」、第III類を「私鑄貨泉」に、おのおの対応するものとしてとらえている）、また、3)近年、文殊省三氏は1939年採集の貨泉・鉢・台付無頸壺・蓋などの瓜破遺跡出土遺物の再検討をおこなっているが、氏の言うところの「鉢だけでは時期決定が困難である」が、「瓜破遺跡出土の台付無頸壺（第V様式ではなく）第IV様式」のカテゴリに属するとし、しかも「出土状況から考えると貨泉（第III類）・鉢と台付無頸壺・蓋の出土した層位はそれほど違わない」との立場から、第III類の貨泉を第IV様式併行期にあてるとする氏の帰結が正しいと評価されるならば、瓜破遺跡において観察される「貨泉と第IV様式土器との共伴関係」は、他の亀井遺跡や巨摩庵寺遺跡において観察される「貨泉と第V様式土器との共伴関係」に、明らかに先行する筈の現象であるばかりか、しかも出土した貨泉は、いずれも後出的な第III類であることを認識する時、畿内第V様式の開始期に関し、1世紀前半をあててしまうのにはやはり問題が伴うこと、その他、補足的な論点として、4)大阪府亀井遺跡からは、貨泉のほかに、弥生時代中～後期の「破砕された突線鈕式銅鐸片」（NR-3003出土）と弥生時代後期の「有田銘小形仿製鏡」（NR-3001河床付近出土）とが、時代を相前後して検出されているが、この銅鐸の破砕と銅鏡の受容とを一連のものと考え、特に小形仿製鏡の出現の契機を、高倉洋彰氏の述べる如く、「…中国鏡の流入途絶期に、北九州以外の地域が遅れて鏡を必要とする社会へと変質を始め…、鏡を必要とする社会の拡大が中国鏡の流入途絶期と重複したため、絶対量の不足の解消策として中国鏡の破鏡が行なわれ、そし

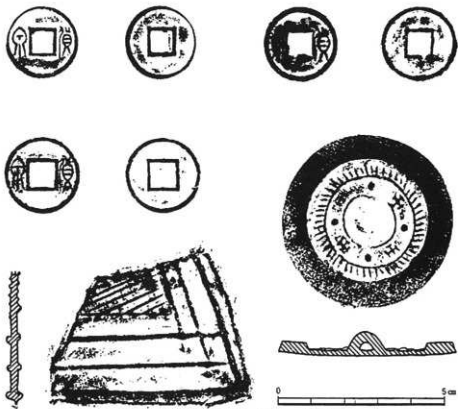


1. 鉢 2. 台付無類鏡 3. 蓋

第87図 瓜破遺跡 貨泉共伴土器

て北部九州における鏡仿製を開始させ⁽²¹⁾たと考え、しかもその時期を、小田富士雄氏の言われるように、「安帝の永初元年(107)倭国王の朝貢後」、「魏の建国後の景初三年(239)に卑彌呼の遣使によって魏鏡の輸入が再開されるまで⁽²²⁾」の時期とみなす立場にたつならば、亀井遺跡出土の弥生後期の小形仿製鏡は、西暦2～3世紀代と深く関わりをもつ鏡となり(すなわち、この事実を、弥生後期の一時点を、2世紀初頭以前の段階にすえることに対して、否定的な証左を呈示している)、しかも、先程少しふれたように、弥生時代後期における銅鏡祭祀の受容そのものと伝統的な銅鐸祭祀の放棄そのものとの間に表裏一体の歴史的接点があるとする視点に立つならば、弥生時代後期(畿内第V様式)の暦年代は、やはり2世紀代におちつくだらうと考えていることなどが、その直接・間接の主な理由である。

以上、「石才南遺跡の暦年代」と題して、特に「単一貨泉論」批判を基底におきながら、「畿内第V様式土器・1世紀前半開始説」に対する幾つかの疑問を率直に提起してきたわけであるが、本稿の中でも簡述したように、「土器の暦年代」という問題ひとつをとってみても、その内容は決して単純ではなく、解決すべき奥行き深い連関の問題を、数多く内包していることを知る事ができる。今後、「貨泉」をはじめとする中国銭貨を大系的



第88図 亀井遺跡出土貨泉・銅鐸片・小型仿製鏡

に研究するという分野も十二分に開拓されていく必要があるが、ひき続き、先学・同学諸氏からの御教示・御批正をいただきながら、問題の解明に力を尽くしていく所存である。

<参考文献>

- (1) 田辺昭三 佐原 真 「弥生文化の発展と地域性—近畿」（『日本の考古学』Ⅲ 弥生時代 1966年 河出書房）。その他に、佐原 真 「倭国大乱の時代」（『邪馬台国の謎を解く—弥生時代の近畿と九州—』 1982年 大阪文化財センター）なども参照されたい。
- (2) 石野博信 「三世紀の高城と本城」（『古代学研究』68号 1973年）
- (3) 丸山竜平 「弥生式土器の終焉—稲野貯蔵用壺の消滅と古墳文化の成立基盤—」（『古代研究』10号 1976年）。
- (4) 寺沢 薫 「弥生時代舶載製品の東方直入」（『考古学と移住・移動』所収 1985年）
- (5) 森岡秀人 「大阪湾沿岸の弥生土器の編年と年代」（『高地性集落と倭国大乱』 雄山閣 1984年）
- (6) 水野清一 小林行雄 編 『図解考古学辞典』「貨泉」の項。（創元新社 1964年版）
- (7) 岡崎 敬 「中国と日本の貨幣の交渉」（『中国歴代貨幣展』 大阪市立博物館 1984年）

- (8) 岡崎 敬 「日本および韓国における貨泉・貨布および五銖銭について」(『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集(上)』 1982年)
- (9) 菅谷文則 「錢貨と年代—とくに王莽銭について—」(『日本考古学協会昭和57年度大会 大会資料—考古学と年代—』 日本考古学協会 1982年)
- (10) 『漢書食貨志』P.1184 中華書局版による。
- (11) 『漢書王莽傳』P.4163、4164 中華書局版。なお、『歴史人物傳記譯注 王莽』(中華書局 1986)の中の注釈では、「…這次更改幣制<漢書・食貨志>記載在天鳳元年、與本傳不合」とあり、また『中国大百科全書 考古学』のP.384では、「地皇元年(公元20)始鑄的『貨布』、『貨泉』とあって、貨泉の初鑄年代を地皇元年においている(中国大百科全書出版社 1986)
- (12) 『後漢書光武帝紀』P.67 中華書局版
- (13) 金少英集訳・李慶善整理 『漢書食貨志集釋』P.309 中華書局 1986
- (14) 『晋書食貨志』P.793 中華書局版
- (15) 龍志強・謝世平 「『貨泉』初探」(中国錢幣学会編 「中国錢幣 1984—1」P.25~38 所収) なお、この論文は、同会編「中国錢幣論文集 1985」の中にも再録されている。
- (16) 唐石父 「『光武貨泉』小議」(中国錢幣学会編 「中国錢幣」 1983 創刊号 P.35、36)
- (17) 金少英集訳・李慶善整理 『漢書食貨志集釋』 P.302 中華書局 1986
- (18) 福永光司 『道教と日本思想』 P.96、97 (徳間書店 1985)
- (19) 中国科学院考古研究所編輯 『洛陽燒溝漢墓』 P.222、226 (科学出版社 1959)。本文中では、147号墓および1035号墓から出土した「貨泉」は、私鑄銭と考えられて「雜銭」の項で論じられているが、共伴の延熹銭の年代が「熹帝和獻帝時」のものと考えられるため、2世紀末葉から3世紀初葉にかけての年代が与えられている。
- (20) 文殊省三 「大和川河床出土の貨泉・鉢・台付無頸壺・蓋について—瓜破遺跡出土資料の紹介(一)—」(大阪市立博物館 研究紀要 第18冊 1986年)
- (21) 大阪府教育委員会 (財)大阪文化財センター 『龜井』 1982年
- (22) 高倉洋彰 「弥生時代小形仿製鏡について」(『考古学雑誌』 第70巻第3号 1985年)
- (23) 小田富士雄 「発生期古墳の地域相—北九州について」(『九州考古学研究』—弥生時代篇— 1983年)

付章II 花粉分析・珪藻分析結果報告

当分析調査は、発掘調査に伴って露出したA-3区の東壁P-1地点ならびにD区の南壁P-2地点より採取された試料を対象として、花粉分析、珪藻分析を行い、これらの結果より、地質層序、ならびに植生や水域の古環境の推定を行ったものである。

I. 花粉分析

花粉分析の方法

原理

粘土層などの堆積物や遺跡の土壌には、動物性もしくは植物性の微小な化石（＝微化石）が含まれており、それらを物理・化学的処理によって抽出し、顕微鏡で化石の種類や数を検定し、種々の目的にそった調査を行う方法が微化石分析であって、花粉分析はそのひとつである。

堆積物に含まれる花粉化石は、その堆積当時、陸上に生育した樹木や草が生産した花粉が、水系や大気を經由して堆積物粒子とともに埋積したものである。

陸上に生育する樹木や草、つまり“植生”は気候の変化や時代とともに変化し、その変化が堆積物中の花粉化石の構成や量の変化として反映する。

従って、花粉構成や消長データは、地層の識別や対比、古植生の復元に利用することができる。

花粉分析結果

(1) 花粉化石の含有状況

前記のように、10試料の花粉分析を行った結果、そのうち5試料が花粉化石を含有していたが、P-1地点の分析試料のうち試料№2、4、5とP-2地点の分析試料のうち試料№1は化石がほとんどふくまれず、試料№5は含有量がごく少なかった。

(2) 検出された花粉化石の種類

検出された花粉化石は、下記に示す35種類である。

これらのうち、全試料を通じて花粉組成を特徴づける種類は以下のようである。

① 卓越樹木花粉

ニヨウマツ亜属、コウヤマキ属、アカガシ亜属、

② 卓越草本花粉

イネ科、イネ科 (>40)、アブラナ科、ヨモギ属

③ 栽培種花粉

イネ科 (>40)、ソバ属、ワタ属、アブラナ科 (?)

このうちイネ科 (>40) はイネ科のうち、花粉粒径が40 μ 以上のものを示しており、イネ属 (*Oryza*)を含んでいると考えられるが、但し、そのすべてがイネ属であると断定出来ない。

1 Podocarpus	31 Ilex	* 1 Podocarpus	* 31 Ilex
* 2 Diploxylon	32 Acer	* 2 Diploxylon	32 Acer
3 Haploxyton	33 Aesculus	3 Haploxyton	33 Aesculus
4 Picea	34 Tilia	4 Picea	34 Tilia
5 Abies	35 OLEACEAE	* 5 Abies	* 35 OLEACEAE
* 6 Tsuga	36 Myrica	* 6 Tsuga	36 Myrica
7 Pseudotsuga	37 Lagerstroemia	7 Pseudotsuga	37 Lagerstroemia
* 8 Cryptomeria	38 EUPHORBIACEAE	* 8 Cryptomeria	38 EUPHORBIACEAE
9 TAXODIACEAE	39 Liquidamber	9 TAXODIACEAE	39 Liquidamber
10 Sciadopitys	40 ROSACEAE	* 10 Sciadopitys	40 ROSACEAE
11 CUPRESSACEAE	41 Elaeagnus	* 11 CUPRESSACEAE	41 Elaeagnus
* 12 Alnus	42 Symplocos	* 12 Alnus	* 42 Symplocos
13 Betula	43 CELASTRACEAE	* 13 Betula	43 CELASTRACEAE
14 Carpinus	44 Typha	* 14 Carpinus	* 44 Typha
* 15 Corylus	* 45 CHENOPODIACEAE	* 15 Corylus	* 45 CHENOPODIACEAE
* 16 Cyclobalanopsis	* 46 CARYOPHYLLACEAE	* 16 Cyclobalanopsis	* 46 CARYOPHYLLACEAE
* 17 Quercus	* 47 POLYGONACEAE	* 17 Quercus	* 47 POLYGONACEAE
18 Fagus	* 48 CURCIPERAE	* 18 Fagus	* 48 CURCIPERAE
* 19 Castanopsis	49 CAPRIFOLIACEAE	* 19 Castanopsis	49 CAPRIFOLIACEAE
20 Castanea	50 Menyanthes	20 Castanea	50 Menyanthes
21 Juglans	51 Sanguisorba	* 21 Juglans	51 Sanguisorba
22 Pterocarya	* 52 HALORAGACEAE	22 Pterocarya	52 HALORAGACEAE
23 Ulmus	53 ANACARDIACEAE	* 23 Ulmus	53 ANACARDIACEAE
24 Zelkova	54 THEACEAE	24 Zelkova	54 THEACEAE
* 25 Celtis	55 ERICACEAE	* 25 Celtis	55 ERICACEAE
* 26 GRAMINEAE	* 56 MORACEAE	* 26 GRAMINEAE	56 MORACEAE
* 27 CYPERACEAE	* 57 GRAMINEAE (>40)	* 27 CYPERACEAE	* 57 GRAMINEAE (>40)
* 28 Artemisia	* 58 Fagopyrum	* 28 Artemisia	* 58 Fagopyrum
* 29 Taraxacum	* 59 Gossypium	* 29 Taraxacum	* 59 Gossypium
* 30 COMPOSITAE	* 60 UMBELLIFERAE	* 30 COMPOSITAE	* 60 UMBELLIFERAE

POLLEN TAXA LIST ISHIZAI-R-P-1

POLLEN TAXA LIST ISHIZAI-S-P-2

(3) 花粉組成の変遷傾向

① 東壁P-1地点の花粉組成変遷と分帯

試料No.1～5において、分析結果の得られた、試料No.1と3の花粉組成は下位より以下のとおりである。

・試料No.3はニヨウマツ亜属とアカガシ亜属が卓越し、コナラ亜属を伴う。草本タクサは樹木タクサより高い出現率を示し、イネ科、ナデシコ科、アブラナ科、イネ科 (>40)、ソバ属などが卓越する。

・試料No.1は試料No.3と同じくニヨウマツ亜属、アブラナ科が卓越するが、アカガシ亜属、コナラ亜属、ナデシコ科などは低率となる。

② 南壁P-2地点の花粉組成変遷と分帯

試料No.1～5において、分析結果の得られた、試料No.2～4の花粉組成は下位より以下のとおりである。

・試料No.4はコウヤマキ属が卓越し、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。草本タクサの出現率は低い。

・試料No.3は、コウヤマキ属が卓越し、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う点で、試料No.4と同じ傾向を示すが、草本タクサのイネ科、ヨモギ属、イネ科 (>40)、などが高率となる。

・試料No.2はコウヤマキ属に加えて、ニヨウマツ亜属、ツガ属が卓越し、アカガシ亜属、コナラ亜属はごく低率となる。

草本タクサでは、イネ科、アブラナ科が高率となり、イネ科 (>40) はむしろ低率となる。

II. 珪藻分析

珪藻分析の方法

原理

珪藻は珪質の殻をもつ単細胞の植物プランクトンの一種で、主に河川や湖沼などの淡水域と河口、湾、大洋などの汽水もしくは海水域に生息する。珪藻分析は堆積物の中に含まれている珪藻化石を物理・化学的処理によって抽出し、堆積物生成当時の水域の環境を推定し、あるいは年代に関する検討をおこなう方法である。

珪藻は水域の水溫、塩分濃度、酸性度などの環境要因に対応した種類が、各々の環境許容範囲をもって生息する。抽出された珪藻化石が、堆積物生成当時その水域に生息したものであれば、その種類構成や相対量とその変化から、当時の水域の環境を復元することができる。

珪藻分析結果

(1) 珪藻化石の含有状況

前記のように、10試料の珪藻分析を行ったところ、そのうち5試料は珪藻化石を含有していたが、残りの5試料にはほとんど化石が含まれていなかった。

珪藻化石が含まれていないことの原因としては、試料が粗粒であるため本来珪藻の含有率がごく低いことと風化作用等によって消失したものでないかと考えられる。

(2) 検出された珪藻化石の種類

検出された珪藻化石の種類は、以下に示す46種類である。

これらのうち、珪藻組成を特徴づける種類は以下のようである。

① 卓越種類

Cymbella aspera

Eunotia praerupta

Pinnularia gibba

Pinnularia viridis

Stephanodiscus astraea

これらはいずれも淡水域の種類であり、真止水性種～流水不定性種である。

(3) 珪藻組成の特徴

① 東壁P-1地点の珪藻組成

珪藻組成は、下位より以下のような変遷を示す。

試料No.3は、*Pinnularia viridis*, *Eunotia praeurupta*など好酸性種が卓越する。

いっぽう、それより上位の試料No.2~1は、*Cymbella*属、*Stephanodiscus*属など中性~好アルカリ性種が卓越する。

- | | |
|------------------------------------|--------------------------------------|
| * 1 <i>Actinocyclus ellipticus</i> | * 30 <i>Melosira ambigua</i> |
| * 2 2 A. spp. | * 31 M. <i>granulata</i> |
| * 3 <i>Coccinodiscus lineatus</i> | * 32 <i>Naviula americana</i> |
| 4 <i>Pleurosigma</i> spp. | 33 N. <i>hacillum</i> |
| * 5 <i>Cylotella styloum</i> | * 34 N. <i>cuspidata</i> |
| * 6 <i>Diploneis smithii</i> | * 35 N. <i>mutica</i> |
| * 7 <i>Nitzschia obtusa</i> | 36 <i>Neidium affine</i> |
| 8 <i>Amphora ovalis</i> var. | 37 N. <i>hischokii</i> |
| 9 <i>Anomooneis vitrea</i> | * 38 N. <i>iridis</i> |
| 10 <i>Caloneis ventricosa</i> | * 39 <i>Nitzschia</i> spp. |
| * 11 <i>Cylotella comta</i> | * 40 <i>Pinnularia acrosphaeria</i> |
| * 12 C. <i>kuetzingiana</i> | * 41 P. <i>appendilata</i> |
| * 13 <i>Cymbella aspera</i> | * 42 P. <i>borealis</i> |
| * 14 C. <i>tumida</i> | * 43 P. <i>gibba</i> |
| * 15 C. <i>turgida</i> | 44 P. <i>hemiptera</i> |
| 16 C. spp. | * 45 P. <i>interrupta</i> |
| * 17 <i>Eunotia lineolata</i> | * 46 P. <i>macilenta</i> |
| 18 E. <i>lunaris</i> | * 47 P. <i>major</i> |
| 19 E. <i>monodon</i> | * 48 P. <i>mirostauron</i> |
| * 20 E. <i>pec. var. minor</i> | * 49 P. <i>viridis</i> |
| * 21 E. <i>pec. var. ventralis</i> | * 50 P. spp. |
| * 22 E. <i>praeurupta</i> | * 51 <i>Rhopalodia gibba</i> |
| * 23 E. spp. | 52 R. <i>gibberula</i> |
| * 24 <i>Frustulia rhomboides</i> | * 53 <i>Stauroneis phoenicentron</i> |
| * 25 <i>Gomphonema acuminatum</i> | * 54 <i>Stephanodiscus astraea</i> |
| * 26 G. <i>angustatum</i> | * 55 S. spp. |
| * 27 G. <i>constrictum</i> | 56 <i>Surirela angusta</i> |
| * 28 G. <i>graile</i> | 57 S. <i>tenera</i> |
| * 29 <i>Hantzschia amphioxys</i> | * 58 <i>Synedra ulna</i> |

② 南壁P-2地点の珪藻組成

試料No.2~1はほとんど同じ珪藻組成を示し、Cymbella属とPinnularia属が卓越する。

いずれの場合も海水の影響はないものと判断される。

1 Actinocyclus ellipticus	30 Melosira ambigua
2 A. spp.	* 31 M. granulata
3 Coscinodiscus lineatus	32 Naviula americana
4 Pleurosigma spp.	33 N. bscillum
5 Cylotella stylum	34 N. cuspidata
6 Diploneis smithii	35 N. mutica
7 Nitzschia obtusa	36 Neidium affine
8 Amphora ovalis var.	37 N. hitchcockii
9 Anomooneis vitrea	38 N. iris
10 Caloneis ventricosa	39 Nitascia spp.
11 Cylotella comta	40 Pinnularia acrosphaeria
12 C. kuetzingiana	41 P. appendilata
* 13 Cymbella aspera	42 P. borealis
14 C. tumida	43 P. gibbs
15 C. turgida	44 P. hemiptera
* 16 C. spp.	45 P. interrupta
* 17 Eunotia lineolata	46 P. macilenta
* 18 E. lunaris	47 P. major
19 E. monodon	48 P. mirostauron
* 20 E. pec. var. minor	49 P. viridis
* 21 E. pec. var. ventralis	* 50 P. spp.
* 22 E. praerupta	51 Rhopalodia gibba
* 23 E. spp.	* 52 R. gibberula
24 Frustulia rhomboides	53 Stauroneis phoenicentron
25 Gomphonema acuminatum	54 Stephanodiscus astraea
26 G. angustatum	55 S. spp.
27 G. constrictum	56 Surirela angusta
28 G. graile	57 S. tenera
29 Hantzschia amphioxys	* 58 Synedra ulna

DIATOM TAXA LIST ISHIZAI-S-P-2

III. 考察

(1) 花粉化石によるP-1とP-2地点の層序関係について

P-2地点の試料№3、4はアカガシ亜属ならびにコナラ亜属の広葉樹タクサが一定の出現比率を示し、ニヨウマツ亜属の出現率が低い。このことは、完新統上部において、自然植生要素であるアカガシ亜属やコナラ亜属が、二次林要素であるニヨウマツ亜属に置き換わってゆくという一般的な樹木植生の変遷からすると、両地点の中でP-2地点の試料№3、4は最も下位の層序に当たると考えられる。

これに対して、P-1地点の試料№3は、ニヨウマツ亜属やイネ科(>40)の出現率が高い点から上記層序よりは上位になると考えられる。

P-1地点の試料№1は自然植生要素の出現率がごく低く、ニヨウマツ亜属のみが卓越する点から、上記の考え方に立てば、最も上位の層序であると考えられる。

P-2地点の試料№2は、上記広葉樹タクサの出現率は低いが、本来自然植生要素であるコウヤマキ属とツガ属の出現率が高い。このような植生の状況が広葉樹タクサの減少過程で存在したかどうかは不明であり、イネ科(>40)などの栽培要素の出現率が高くないことからすると、№2の層序は、段丘堆積物などの二次堆積物である可能性も残る。

(2) 植生の変遷について

植生の変遷は、(1)の層序関係に関する考えに立脚すると、遺跡地周辺のカシ林や山麓から山腹にかけての温帯針葉樹類からなる自然植生が、アカマツとクロマツを主体とする二次林とイネ科および栽培植物類からなる草地へと変化したものと推定される。

その際、ツガやコウヤマキの比率が高いことは、遺跡地が山腹などから直接流水(水系)によって物質が運ばれてくる環境にあったと推定され、遺跡地周辺にコウヤマキ林などが分布したとは考えにくい。

(3) 栽培植物について

栽培植物に属すると考えられるものには、イネ科(<40)、ソバ属、ワタ属があり、この他アブラナ科もナタネなどの栽培植物である可能性がある。

P-1地点においては、№3においてソバ属の比率が高い。

この他、P-1地点の試料№1と№3ではアブラナ科が顕著な高率を示す。

(完)

図

版

図版一 石才南遺跡 全景





西方向より



南方より



西方向より



南方向より



西方向より



南方より



西方向より



東方向より



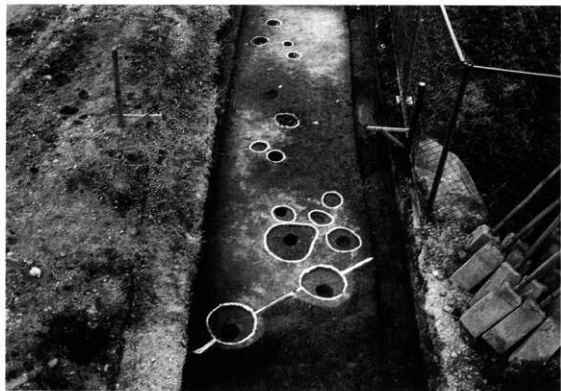
E・F区 北方向より



G・H区 西方向より



トレンチ掘削状況



トレンチ1 遺構検出状況



トレンチ2 遺構検出状況



トレンチ4 北壁断面



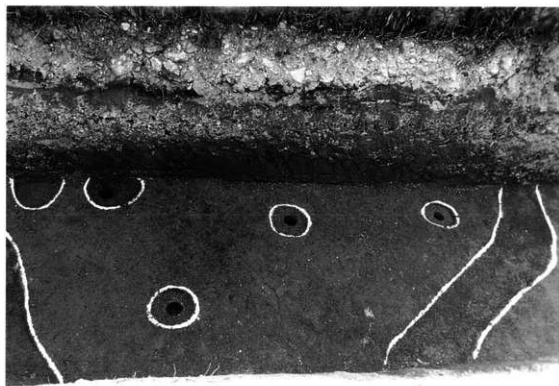
トレンチ7 遺構検出状況



トレンチ8 遺構検出状況



トレンチ10 遺構検出状況



トレンチ10 遺構検出状況



包含層掘削状況



南壁断面



遺構面精査



全景（西方向より）



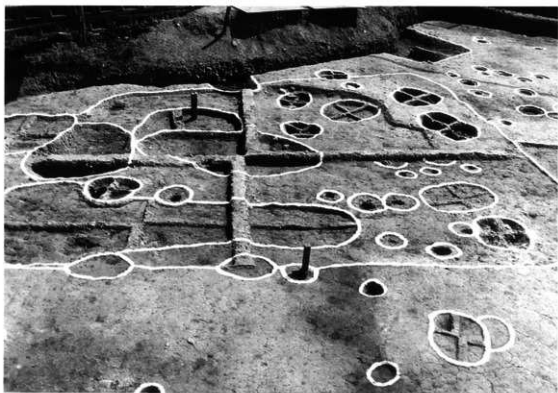
260-OD (東北方向より)



1・2-OD (東方向より)



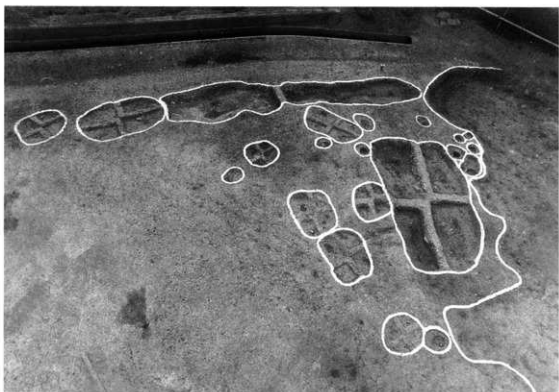
東方向より



西方向より



15-00付近（西方向より）



6-00付近（西方向より）



東方向より



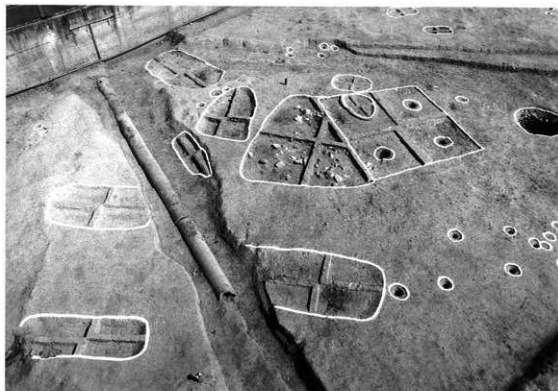
東方向より



410-OD (西方向より)



410-OD (西方向より)



401・402-OD (西方向より)



401・402-OD (東方向より)